

2017 年 10 月 15 日（日）「神の国の拡大 ～からし種の譬え／パン種の譬～」

マタイ 13:31-33

31 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、32 どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」

33 イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れると、全体がふくらんで来ます。」

### 【序論】

今日は二つの譬話、「からし種の譬」と「パン種の譬」を学びます。いずれも「神の国」を比喩的に表した教えです。「神の国」という言葉を初めてお聞きになる方は、一体何の話だと思われるかも知れません。それは、言い換えますと、目に見えない神の支配が始まっているということ。この世の常識を覆す神の価値観が火の玉のように飛び込んできたという事件です。2000 年以上前に、イエス・キリストの誕生と共にそれが始まりました。私たちはどうにかその「神の国」というものを理解し、掴もうとしています（目に見えないからよく分からない）。主イエスも私たちが理解できるように、譬話によって「こういうものだよ」と教えて下さいました。しかし、譬話というのは、話そのものとしては日常生活に即した内容であるため理解し易いのですが、その奥に秘められた真理を悟るという点においては大変に難しい。主が真理を隠すために敢えて譬話をお用いになったとさえ言われているのです。これらの譬話の意味は、当初ごく少数の主の弟子たちだけに明かされました。誰にでも明らかにされた訳ではなかったのです。そのような主の方法には目的がありました。それこそが今日のテーマ、「小が大となるため」であります。

### 【本論】

#### 本論 1. からし種の譬

イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」（13:31-32）

「からし種」というものを見たことがおありでしょうか。イスラエル・スタディーツアーに行った友人が持って帰ってくれたので、私は手にとって見たことがあるのですが、ゴミと間違えてしまいそうな、本当に小さな黒い種でした。とはいえ、実際にはもっと小さな種も世界には存在するようで、主イエスは当時よく言われた「非常に小さなもの」を表す諺として引き合いに出されたに過ぎません。ところが、この小さな種が良い地に蒔かれると、3～5m もの灌木に成長するそうです。

このように、主イエスは「神の国」を、「最初取るに足らないものが最後はとてつもなく大きくなる」もの



として説明されました。しかし、問題は何が大きくなるのかであります。これは主のミニストリーの方法から理解することができる。「からし種の譬」は、明らかに当初少数派であった弟子たちがやがて驚くべき数に増え広がることを示しています。当時、多くの人が抱いていた「神の国」のイメージは、それが到来するとたちまちのうちにイスラエルの敵を打ち滅ぼす大帝国が築き上げられるというものでした。イスラエルを植民地下に置き、軍事力で圧倒し、国民から法外な税金を搾取し、徴兵に駆り立てるローマ帝国を一瞬にして打ち破るべきメシヤの到来が切望されていたのです。迫害が強い時代ほど、この「メシヤ熱」は高まり、それと思しき人が現れると、劇的な変化が期待されました。主イエスもその一人に数え上げられたのですが、主がなさっているミニストリーはそういうものではなかった。主は僅か 12 人の弟子を周囲に置き、細々と彼らに福音を教えておられた。まさに「からし種」のような、取るに足らない活動をしておられる主イエス。人々にとっては期待外れであり、こんな奴らが帝国をひっくり返せるはずはないと嘲笑ったはずです。笑われる弟子たちの中にも苛立ちがあったかも知れません。俺たちを通して世界に何事かが起きるはずなのに、一向に外向きの状況は変わっていない。これは宣教師が宣教地に派遣され、なかなか結果を出せない時に感じる焦りとも似ているでしょう。祖国に良い報告ができない。お前は一体何をやっているんだ？という暗黙の責めに苦しむのです。

しかし、主イエスは言われます。神の国とはいきなり拡大するものではないと。目にも見えないほど小さな種（福音の御言葉）が蒔かれ、一人の人の心で芽を出す。その人の内で神の国が広がり、更に周辺の人々に伝達されていく。これはゆっくりと進み、確実に広がっていくものなのです。思えば、東伏見の教会も僅か 8 人でスタートしましたが、23 年の時を経て、主は一步一步導いてきて下さいました。御言葉の種を蒔き続けるところには、必ず成長が伴うのです。

## 本論 2. 木のイメージ

「木」という表現が出てきますが、主のイメージの元になっているのはどうも、旧約聖書に出てくる幾つかの帝国のようです。エゼキエル書（エジプト）、ダニエル書（バビロン）では、大帝国の比喩表現として「木」が登場します。

- ・ 人の子よ。エジプトの王パロと彼の大軍に言え。あなたの偉大さは何に比べられよう。見よ。アッシリヤはレバノンの杉。美しい枝、茂った木陰、そのたけは高く、そのこずえは雲の中にある。水がそれを育て、地下水がこれを高くした。川々は、その植わっている地の回りを流れ、その流れを野のすべての木に送った。それで、そのたけは、野のすべての木よりも高くそびえ、その送り出す豊かな水によって、その小枝は茂り、その大枝は伸びた。その小枝には空のあらゆる鳥が巣を作り、大枝の下では野のすべての獣が子を産み、その木陰には多くの国々がみな住んだ。（エゼキエル31:2-6）
- ・ 私の寝床で頭に浮かんだ幻、私の見た幻はこうだ。見ると、地の中央に木があった。それは非常に高かった。その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからでもそれが見えた。葉は美しく、実も豊かで、それにはすべてのものの食糧があった。その下では野の獣がいこい、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。（ダニエル4:10-12）

これらの箇所には、いずれも空の鳥がやってきて巣を作って住み着く描写があります。諸国の民がその帝国の養いを求めて訪れることが言われているのでしょう。主イエスがこれらの箇所から神の国をイメージしておられるとすると、今は「からし種」のように小さな共同体が、やがて巨大な神の民となり、世界中の民がその「木」の下に安息を求めて来るようになることが予告されているはずです。もう一箇所、エゼキエル書でメシヤ王国を比喩的に表している箇所を引用しておきましょう。

神である主はこう仰せられる。「わたしは、高い杉のこずえを取り、そのうちから、柔らかい若枝の先を摘み取り、わたしはみずからそれを、高くてりっぱな山に植える。わたしがそれをイスラエルの高い山に植えると、それは枝を伸ばし、実を結び、みごとな杉の木となり、その下にはあらゆる種類の鳥が住みつき、その枝の陰に宿る。」

（エゼキエル17:22-23）

以上のように、「からし種の譬」は外的な意味における神の国の拡がりについて語っていました。しかし、その拡大が始まるためには、莫大なエネルギーを秘めた一粒の「からし種」が地に蒔かれなくてはならなかった。それは、主イエスの命という種です。そして、主の十字架を負って従って行く者にしか、神の国を前進させることはできないのです。

### 本論 3. パン種の譬

イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れると、全体がふくらんで来ます。」(13:33)

この「パン種の譬」は「双子の譬話」と呼ばれるほどに「からし種の譬」と似ています。「小さなものが大きくなる」という意味において共通点があるのです。しかし、同じ神の国の譬でありながら、見る角度に違いがあります。「パン種の譬」では、どちらかというといふ内面的・質的な成長に焦点が当てられていると言ってよいでしょう。

「パン種」とはパンの生地を膨らませる所謂「酵母」のことですが、私たちにとって身近なものです。当時のパレスチナにおいても、家庭で日々使用されているものでした。パン屋という便利なものはなかったようで、各家庭で婦人がパン生地をこねて焼いていたのです。ここでは「**三サトンの粉**」という表現がありますが、これは量としては40 リットルもあり、一般的な家庭ではこんなに作ることはまずありません。婦人が一回の釜で扱うことのできる最大量という意味だと思われます。

「パン種」はパン生地を膨らませるのに役立つものですが、イスラエルでは宗教的な意味で「悪の浸透力」を象徴するものとして見られていたという事実があります。ユダヤの過越の祭では、パン種を除去することが宗教的な定めとなっていました。主イエスが敢えて悪いイメージを持たれる可能性のある「パン種」を「神の国」のイメージに用いられたのは、ちょっと考えさせられます。読み込みすぎかも知れませんが、主イエスご自身が正統的ユダヤ教から「神を冒瀆する者」「悪を蔓延させる者」と見做されたことが、その背景にあるのかも知れません。主は折々に、良い意味でも悪い意味でも「パン種」について語っておられます。ここでの「パン種」は良い意味で浸透し、やがてはパン全体を変革してしまうほどの力を持っていることを言い表しています。

この「パン種の譬」は、キリスト者一人一人の内面とも関わる話でしょう。「パン種」「酵母」というものは目には見えないものです。神の言葉も目に見えませんが、それは聞いた人の心に落ち、広がるのです。その心が種の力によって良い地とされ、芽が出てくる。人の心を変えるのは聖霊の御業です。この聖霊の内的な働きによって、一人の人の内で神の国は広がっていく。その人の人生全体に広がる。私たちを福音に生かし、私たちの思考を造り変え、行動を促す。やがて私たちの存在全体が栄化されるでしょう。

すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためです。ですから、私たちは勇気を失いませぬ。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

(Ⅱ コリント 4:15-16)

## 【結論】

私は大学から7年間寮生活をしました。その生活の中では、クリスチャンの集まりで  
ありながら、深刻な罪が蔓延することがありました。一時期、男子寮内で盗難が相次い  
だのです。そのことに胸を痛めた寮運営委員会が掲げたキャッチフレーズは「男子寮が  
変われば世界が変わる」というものでした。そして、男子寮の入口には横断幕が掲げら  
れました。このキャッチフレーズを見て笑った人もいましたが、寮運の人たちが聖霊に  
よって男子寮が造り変えられることを求め、その変革が世界全体にまで及んでいくこと  
を願った切なる言葉だったということを思います。実際に、それが実現していくには時  
間がかかるでしょう。しかし、当時寮生活をしていた私の心には、彼らの宣言が今でも  
残っています。そして、私もこの伝道の働きの中で、この地から福音が広がっていくこ  
とを切に願っています。真の悔い改めがこの群から始まっていきますように。

## 【祈り】

聖霊なる神様。どうぞ私たちの内にあって、力強く働いて下さい。私たちを根本から  
造り変え、その聖なる変革が、周囲の人々に影響を与え、やがては全世界に満ちる福音  
の香りとなりますように。私たちはキリストの香りを放っているのでしょうか。私たちの  
思考も、言葉も、行動も、神の国を証しするものとなりますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
無からの天地創造の如く、一粒の種から福音の世界的拡がりをもたらし給う、父なる神  
の愛。  
莫大なるエネルギーを秘めた「からし種」として、地に落ち給いし、主イエス・キリス  
トの恵み。  
各々の人格全体、人生全体を造り変え、福音の香りを豊かに放たせ給う、聖霊の親しき  
交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。